

「《^{チェインド}祀徒》とはかくあるべき
～祭主向上委員会パイロット版～」

——福岡市、某所。

とある廃病院の前に最少人数で構成されたロケハンが撮影をし始めていた。

ライトを当てられ、マイク付きの小型カメラを向けられているのは、地元でちょっとだけ名が通っているローカルタレント。

芸名はチョコ [-]。

正式表記はchikoだけど、とある局のプロデューサーから「気取ってんじゃねえよ」と言われて渋々チョコという表記にしている。名前の表記を理由に仕事がもらえないでナンセンスだからだ。

大分県出身で、主にリポーターとして福岡のテレビ局で重宝されているモデル上がりだ。

胸としての膨らみが足りてない分、タンクトップにホットパンツという腕や生足を露出することで頑張っている。

「みなさん、こんばんは……。

ここは、知る人ぞ知る旧総合病院前です……。

かつてはこの地域の医療を担っていた場所でしたが、今や《^{ノーライフ}雑霊》が跋扈するスポットとして、地元住民も近寄らなくなっています……。

今晚、私ことチョコがこの廃病院にやってきた理由、それは——」



——1週間前。

チョコは顔なじみのローカルタレント達と共に、福岡トンコツ放送（FTB）内にある会議室で面接を受けていた。

今や全国区のタレントでモノマネでお馴染みの漫オコンビや、地元じゃ見ない日はないベテラン芸人たちまで参加していた。

そんな場所でまだまだタレントとしては駆け出しなチョコは、小さくなって自分の番を待っていた。

こんな面子じゃ自分が選ばれることなんてないな、と思いつつ自分の名前が呼ばれるのをチョコは待つ。するとチョコの順番の前だったピン芸人が出てきた。その表情は怪訝で、今にも毒を吐きそうな様子だった。

——いったい何を言われたのやら？ そういえば面接時間が短かったかも？ などと思いつつ面接会場へと足を踏み入れるチョコ。

「はいはい、座って座ってえー」

「それじゃ、まず名前はー？」

「チョコと申します」

面接官は女性が2人。

長い黒髪と眼鏡が特徴的なチョコよりもちょっと年上そうな女性と、ゴスロリがよく似合っているチョコよりも10は年下に見える少女だった。

チョコは一瞬で生じた様々な疑問を押さえつつ、面接官からの質問に答えてゆく。

「パーソナルデータはこっち把握してるから、まず率直なところを聞かせてもらいたいんだけど……」

「チョコさん、あなた《^{チェインド}祀徒》だそうですね？」

「はい……一応は……」

「《^{レリック}霊器》の種別は？」

「素手です」

「——で、どの程度できるの？」

「えっ……？」

「つまりねえ、《^{ノーライフ}雑霊》を駆除した経験はあるかどうか？ ってことお」

「結果的には何度か……」

「いいねいいね。それじゃあ、今回の番組主旨を説明させてもらうよ。今回のオーディションはこの秋から始まる新番組『祭主向上委員会』のメイン出演者を選ぶためのものなんだよね」

「ウチの番組は、この九州じゃ無駄に恐れられがちな《祭主》および《^{チェインド}祀徒》って、こんなに頼れて親しみやすいんですよー、っていうのを様々な形式で視聴者の皆様にお伝えするという感じなのよねえー」

「だから、出演者はまず《^{チェインド}祀徒》だってことが前提。タレントとしての実力は二の次なんだよね」

「は、はあ……」

「番組のパイロット版は、ガチの心靈スポットでの《^{ノーライフ}雑霊》退治だけど……やるう？」

「えっと、その……私、やりますっ！」

「そりゃあ、助かる。なかなか《^{チェインド}祀徒》で首を振ってくれた人がいなくてさあ。たぶん、アンタに決まると思うよ」

「ありがとう……ごさいますう……」

「もちろん、チョコさんよりも《^{チェインド}祀徒》としていい人がいたらそっちになっちゃいますけどねー。

とりあえず、キープされたって思ってくれていいですよ
おー」

——こうして、チコは『祭主向上委員会』パイロット版出演者として選ばれたのだった……。

◆ ◆ ◆

「——目下、《祭主》と契約中の《^{チェインド}祀徒》としてすべき
《^{ノーライフ}雑霊》の排除をするためです！」

チコは緊張していた。

《^{ノーライフ}雑霊》退治が恐くてとかそういうことではない。

いかにして番組を盛り上げるのかを今ひとつ掴み切れては
いなかったからだ。

——こんなことなら、この手の仕事もやっておけばよかったなあ。昔のバラエティー番組でやってたらしい心霊スポット巡りとか……。

照明が落され、暗視カメラでの撮影が開始される。

霊力にさらされると精密機器が誤作動する可能性があるの
で、機材はいずれも耐霊加工済み。この機材なら多少霊気濃
度が高い場所でも撮影に支障はないそうだ。

頭に視線を捕らえるカメラを装備したチコを先頭に、カメ
ラマンと照明を持った2人が続く。

面接の際に面接官だった黒髪女性とゴスロリ少女の2人だ。

チコは実況中継をしつつ、前へ前へと足を進める。

正面玄関から待合室へ……待合室から長い廊下を通って病
棟へ……ナースステーションらしき場所を通りかかった頃—
—

——ドカッ！ ドカンッ！

「ひっ、ひうっ！？ ……じゃ、なかったですね。今、すご
い物音が……ひよっとすると……これはおそらく……
《^{ノーライフ}雑霊》のしわざ——」

——ガンッ！ ガガンッ！ ガガガーンッ！

「——こ、これは相当気性の荒い《^{ノーライフ}雑霊》のようですね。で
すが、《^{ノーライフ}雑霊》と分かっている以上、怯える必要はありません……物を動かして明確には見えづらいただけですから、実
体化率60%程度というところでしょうか？ 私が与えられて
いる《^{チェインド}祀徒》としての力さえあれば——」

——ブーン！

突如、チコに目がけて椅子が飛んでくる。

「——トリアアッ！！」

——バキッ！

見事、椅子を蹴り払うチコ。

「どうやら歓迎されてないようですね。退治しに来てるわけ
ですから、当然ですけど……さあさあ、いよいよ《^{ノーライフ}雑霊》

の登場は近いですよお……」

さらに病棟を進むチコ。

しばらく物音すらなかったのだが、中庭へも出られる渡り
廊下に差し掛かった頃、異変が生じた。

病棟で囲まれるような形で存在しているその中庭の中央に
ある噴水から、身の丈3mはあるかと思われる巨大でぼんや
りと白い人型の塊が現われたのだ。

チコの頭が僅かに後ろを振り返ろうとしたが、彼女の持つ
プロ根性が押し止めた。

「……み、みなさんっ！

あれがこの廃病院に蔓延る《^{ノーライフ}雑霊》ですっ！

実体化率80%オーバーの、ですっ！

あっ、このカメラじゃ映ってないかもでしょうから、精一
杯リポートしつつ戦ってみます！

——えっと、その……超でっかいですっ！」

多少の恐れを確実に抱きつつ、チコはリポーターとして実
況を続けてみせる。

幽体は、実体化率によってカメラに映らないことがあると
チコは聞かされていた。カメラに映るようになるという目安は、
およそ実体化率80%から。この大型の《^{ノーライフ}雑霊》ならたぶん
カメラにも映っているだろうが、そうでない可能性もある。

「あっ、《^{ノーライフ}雑霊》の作った巨大な拳が私目がけて飛んできて
ますっ！ カメラさん達を巻き込まないよう、戦いを挑んで
みますっ！」

チコは《^{ノーライフ}雑霊》から放たれた拳を前方へ突っ込むことで
躲してみせると、そのまま噴水目がけて突っ込んで行く。彼
女の頭に着けられている目線カメラは、白くぼんやりとした
《^{ノーライフ}雑霊》の身体をしっかりと捕らえていた。

そして次の瞬間、カメラが上下に激しく揺れ——

「——チェストオオーツ！！」

噴水の縁を踏み台にしてチコの身体が蹴りを放ちつつ鋭く
舞ったかと思うと、《^{ノーライフ}雑霊》の白い巨躯のど真ん中を突き抜
けた。

——手応え……いや、足応えありっ！

チコが確信した通り、身体に大穴を空けられた《^{ノーライフ}雑霊》は、
その場の空気を振動させつつ霧散した。

「——やった！ 倒せたっ！ やりましたっ！」

一瞬、その達成感から我を忘れたチコだったが、すぐに自
分の立場と役割を思い出す。

「この廃病院を支配し続けていた《^{ノーライフ}雑霊》を、どうやら倒す
ことが出来たようです！ これは私だけの力ではなく、《祭
主》様から力を貸し与えられたことで成すことの出来た……

えっ？ あれ？」

達成感に充ちていたチョコの心が一気に冷え込む。

だが、その理由をチョコの目線カメラもスタッフが持っているカメラも捉えることはできなかった。

チョコが固まった理由。

噴水の先から……今度は水が出る全ての穴から、白くてぼんやりとした《^{ノーマライズ}雑霊》が。

サイズこそ人並み程度の《^{ノーマライズ}雑霊》が、何体も何体も生み出され続けているからだだった。

今し方倒した《^{ノーマライズ}雑霊》の実体化率は高かったが、いま生み出され続けている《^{ノーマライズ}雑霊》の実体化率はまちまちで、おそらくはその大半はレンズで捉えることができていないだろう。

「——な、なんなの、この数……いったい、どれだけの《^{ノーマライズ}雑霊》が出てくるの……？」

そうチョコが恐怖に戦っている間も《^{ノーマライズ}雑霊》が無尽蔵に生み出され続け……今や、広い中庭は《^{ノーマライズ}雑霊》で埋め尽くされつつあった。

「こ、こんなの無理い……こんなに大勢は、相手になんてできないよお……」

ついにチョコはその場で尻餅をついてしまう。

完全に心が折れた瞬間だった……。

薄れゆく意識の中で、チョコはこんな声を聞く。

「いもちゃん、この娘もう限界よ！

なんとか“交渉”（誘導）してみて！」

「まったく、しょうがねえなあ！ やってやるよ！

ヨシコはチョコの回収な！」



こうしてチョコは、パイロット版『祭主向上委員会』の撮影をしくじった。

今回、チョコが負った心の傷は、決して浅くない。少なくとも、パイロット版の取り直しまでに回復するかどうかは微妙なところだろう。

番組プロデューサーの小野妹子 [おのの・いもこ] と放送作家の紫式部 [むらさきしきぶ] ことヨシコ・クリスティーン [一・一] は、パイロット版の取り直しに際して新たな《^{チェインド}祀徒》を複数名探さなければならなくなったのだった……。

■マスターより

・当シナリオは、ローカル番組『祭主向上委員会』に出演者やスタッフとして関わることとなります。

・現状は、福岡市某所の廃病院に巣くっている《^{ノーマライズ}雑霊》を退

治しつつ、番組パイロット版の撮影をするのが目的です。

・《^{ノーマライズ}雑霊》は主に病院中庭中央に位置する噴水から出現していますが、病棟内でも確認されています。

■シナリオの目安

危険度：★～★★★★

対応人数：制限無し

キーワード：「ローカル番組」「《^{ノーマライズ}雑霊》退治」「九州」「×」

■関連選択肢

A012100

「とあるローカル番組のパイロット版撮影に関わってみる」

備考：年齢、性別、組織等、参加にあたっての制限はありません。

個人としてゲームを楽しむための交流の範囲を越えない場合に限り、この「初期情報」の複製、サイトへの転載を許可します。著作権等の扱いについては、公式サイト (<http://else-mailgame.com/gddd/>) を参照ください。

copyright 2012-2013 ELSEWARE, Ltd.
